

特54

21

中嶋倭筋

修吉國海



芝居新編



新編 芝居新編

野川流派源
梅須磨凱陣

第一幕目
新吉原仲の町玉屋の場

第二幕目
尾崎村穰多小箱殺の場

第三幕目
鷺尾森右衛門妾宅の場
若殿慶三郎切腹の場

第四幕目
本國濱御殿御酒宴の場

第五幕目
本國西臺寺焼香の場
鷺尾森右衛門邸の場
舞鶴左膳屋敷の場

第六幕目

本所原庭喜治馬内の場

七幕目
千住驛本陣泊りの場
小梅村地藏堂の場

八幕目
老女村川部屋の場
鷺尾妾宅姉殺の場

九幕目
京都三條通り刀屋の場
同柳の馬場旅館の場

大詰
本城能舞臺の場

同返し
本城奥庭甚之助腹切の場

役人替名

巾着切索の久太	時藏	下田伊織	幸藏
若殿慶三郎	我當	木庄菊之助	
後に涙八源三郎	又吉	後に手代庄之助	
悪七兵衛景清		下部鹿藏	時十郎
桂木甚之助		家中妻櫃の戸	
後に鷺尾甚之助		金貸外山辨助	時五郎
小性頭玉井富右衛門		番場の忠太	
後に雲助富藏		せつた直し重兵衛	瑞久三郎
森右衛門妾おかの		老女村川	冠十郎
忠光の妹伏屋		本庄小兵衛	
左膳の妻高の井		井上喜治馬	
慶三郎弟次郎丸		後に刀屋幸助	
鷺尾森太郎		愛妾お藤の方	圓之助
常陸の經治		後に下女お絹	
奥女中松尾		持成の娘八重姫	鶴松
鴻岡新藏		與小性松若	
百足久五郎		舞鶴左膳	
喜治馬の娘お新		常陸の城主持成	源三郎
後に刀屋の娘お豊		三保谷四郎國俊	
桂木小箱		こし元さつき	源之助
鷺尾森右衛門			

但し筋書之儀の表面の役割と引合之上は請被成下
度候以上

○序幕本舞臺都而新吉原玉屋の大廣間の体愛も懸尾森太郎外諸士四人よて下部の鹿藏を取圍み居る是を仲居留て居る(森)サア鹿藏それへ直れ(諸)さつ貳つ(鹿)たと御家老の若旦那森太郎さまでも罪なく人が切られ升ま(森)ヤア罪なきとはいれまい若殿御遊興の席へ玉井富右衛門本庄小兵衛の手引して参りまは殿へ御諫言申すであらふ(鹿)サアそれの力で行ぬもへ若殿の放埒をお取入りさまへ願ふて御諫めをト爰へ本庄小兵衛出て(小)鹿藏扣へ(諸)貴殿は本庄小兵衛どの(森)おどゞめありしは此場の様子御ぞんじ成るか(小)いかに此程より若殿の御遊興御家老舞鶴左膳どの、さし圖に隨ひ玉井氏と同道よて御諫め入れんが爲殊々承われは是成る下郎ヶ申せよしにて御手討どの事おとめ申すは御身のお爲(森)何某が身の爲と(小)されば士農工商どちちかく入込心遊里にふれば御貴殿の御身にもか、わる義鹿藏がお訛は拙者が(森)いかに御身よめんじゆるして道をふ此

上へ奥にて今一献(諸)森太郎どのトみなく這入る鹿藏小兵衛残り(鹿)あなたさまの御影にて命は助り若殿の惡所通ひも森太郎が進めゆへ(小)何事も申すよト此時仲居留て(仲)モン、ひよんな事が出来升たあなたのお連をおつしやつたお詞が若殿のお耳に障り手討ふるといふて(小)スリヤ玉井うじを打捨おかれぬ案内致せト小兵衛仲居留入る爰へ以前の諸士とさく出て来り(諸)富右衛門をお手討と思ひの外森太郎どの、首がころりト爰へ小兵衛森太郎の首を額に包み持出て来り(小)臆に思ひもふけぬ(諸)サア森右衛門どのへの申し譯は(小)それも師館の上(鹿)玉井さまよ(小)若殿もろとも乗物よて(鹿)とはい、ながら殿のお胸が(小)イヤ首級は持參ト此仕組よて幕

○貳幕日本舞臺都て尾崎村磯多村小霜内の体愛に磯多の唄ア四人同吉雪踏の草を附て居る(吉)サアけふは私し夕勝だよ(唄)チャ、モウおまへ十足の裏が附たかへト

此時向より重兵衛せつた直しの籠をかたげ出る跡より忠飛脚よて出て来り(重)小霜の内から爰だ(忠)有難ふムり升(重)婆アさん内かト内へ這入る(吉)重さん今お歸りか(重)ばアさんはとふした(吉)赤縁で居るよ(重)江戸から使ひか来たよと云ててこまねへ(吉)小霜さんくと呼ぶ「手の内より小霜出て(霜)何だへ使ひか来たのうへ(忠)左様あらあきたが桂木小霜さんでふり升るか(霜)アイわしが桂木小霜江戸とあれを娘の所から(忠)サア譯り知り升せぬが歴々お妻さまが小霜さんに是を儲めわさし升て手紙を渡しては入る(吉)小霜さんはよい娘をもつて仕合だ(霜)それも子どほ名斗りて夫婦別れを仕た時ついで居たアノ娘おまを折く便りをせるがいつもあから重さん此手紙を讀でおくれ(重)讀のはい、か飯でも喰つて(吉)まだ飯いたいてないうら(重)何ぶすだたいてねへ此わまふてへやつた(吉)チャとんでもない事をぬかしヤアがるト是より夫婦喧嘩も成り爰へ甚之助巾着切の拵へにて出

て来り甚之助内へは入り喧嘩を見て(甚)チイ伯父さんおいらの内は何をするのだ(霜)甚之助かはやく留めてくさ(甚)喧嘩をやるなら爰におれの内おめへの内で勝手よとるがい、せ(重)コウ甚坊そふ天窓の兀た者をへこますなけふはおれがわるうつた(吉)わたしの内へト唄アみかくお吉這入る(重)ドレおれも歸らふ(霜)おまへ今歸つらならわらわい手紙も讀で貰いたし(甚)おつかア手紙とは(霜)何よ江戸から便があつたのよ(甚)それならおれが讀ふ(霜)やつぱりいつもの通り重さんに(重)そんならおつかアト小霜重兵衛這入る(甚)懐中よりいろくの品を出して勘定をせる爰へ重兵衛出て来り(重)甚坊さつきの手紙に付ておめへの運か向いて来た跡でお袋も開がい、ト隣りのうちへ重兵衛這入る爰へ小霜出て来り(霜)甚之助けふの仕事はそれざりか甚之助ノ商賣がいをさせろのだ(甚)此鍵の手がやめられるものか(霜)まだ外にい、はあしがある姉の所から(甚)何姉そふして姉の所から

何をいつてよこしか(霜)此手紙の親子の出世手めへを且
那の養子とるとよ(甚)一寸見せなト手紙を見て(甚)此
手紙の様子では姉(甚)旦那の一人息子森太郎若殿の手
懸り世縁のね(所)から此ふれを鷲尾の世繼(霜)とされだ
よよつて悦び酒を呑のた酒を湯着にて吞(甚)あつかア
此ふれが鷲尾の養子よりありやアおめへが湯着酒じやあ
そづかしだ(霜)おれの酒は三日とやめられぬへしかし出
世の悦びよ手めへの素性をいつて聞せよ(甚)譯がある
ならき、てへ(霜)實は手めへの拾つ子だ天王寺邊へ往
た處浪人者が水子を入れ瘡の苦しみの浪人夕肌の
子を頼といふから十六年此方育て上た捨子は實は手めへ
よ(甚)そんならおれの穢多の胤でいねのかそふして浪
人はどふした(霜)大方其夜死なるふよト小霜酒に酔て寢
る(甚)チイかつかア寝るなら本どふに寝ねへこのア
番思案をせにやアあらねへと思入ふて手拭を出して小霜
を殺す(甚)武士の胤と聞からはこのつがあつては邪魔

成る小霜是から鷲尾夕屋敷へ乗込めり立身出世は心の儘
直にそふだト行に懸る爰へ重兵衛用て(重)甚防酒を呑み
に來たせ何だ明りが消て居るせもふ寝たのかト内へ這入
る久太出て此内甚之助花路へ行久太重兵衛を押へる(久
太)親殺しめ(重)何だト此仕組よて暮
○三幕日本舞臺都而鷲尾妾宅の休爰に下部作藏下女おさ
よ住ひ居て(作)おさよとん此足じやよよつて使ひにこな
た往つて下さき(さよ)見たしはいやじやアおア爰へ
妾おかの出て來り(かの)騒がしいとふしたものとや(作)
御新造さま私しは此よふな怪我を仕升たゆへおさよとん
に使ひ頼と升たは往てくれ升ぬへ(かの)怪我をしたと
あればそなた往たがよい(さよ)ハイ(かの)コレ作藏
は御膳の支度を(作)畏り升たとおさよ作藏這入る(かの)
人交りのあらぬ身がふしぎな縁よて旦那さまの是もおか
げそれに又若旦那の御最期より家を繼へさ御子もなく弟
甚之助に知らせて行たも十日跡もふ見へそふあものじや

ナアト此時向ふより森右衛門諸士四人にて甚之助を引立
出て來り(甚)とふぞ御免成れて下されませ(森)かのく
よのモツ了簡しておやり成され(諸)イヤ成りませぬサア
うしやアおれトみさく舞臺へ來る森右衛門内へ這入る
(かの)旦那さま御佛参りお歸りでもり升るのシテそれ
成る伊勢参り(諸)イヤこやつが御家老よふ禮をいたせし
ゆへ(森)今日ハ悴々忌日ゆへゆるしやりたく思ひしが何
分かのくがか聞入れなく(かの)コレこそ伊勢参り何
國の者かの知らねぞ早うお詫びをして行きやいのふ(甚)
ハイ有難うムり升る此國の御家中さまムト尋ね升るも
のがあつて大坂より参り升た(の)何大坂よりト顔を見
て(甚)ヲ、あなたは姉上(かの)弟甚之助か(森)いつぞや
身よはあしをせし(かの)大坂より呼よせし(森)イヤ何も
やすさかのく跡にて委しく何もなく共與よて一献(諸)
然らば御家老トミさく奥へ這入る(かの)コレ甚之助且
那さま御あいさつを(甚)先程の御無禮御免をされて下

さりませ(森)コレかのそらよも嘸悦びならん(かの)是が
嬉しうあつて甚之助をなたがかしこうさへあれば御當家
の御養子よ(森)シテ母のいかせしぞ(甚)その母ハ此世
を去り升てムり升る(かの)スリヤかさんには(甚)手紙
がついたその日にあへなくお果被成れ升た(かの)情ない
事をまたわいのア(森)スリヤ母は病死をせしか何いぞか
あれ奥へ伴ひ悴が衣類と着せ替へ勞れを休めさせたがよ
い(かの)畏り升たトかの甚之助を伴ひ這入る(森)年よ
似合ぬ立振舞ごんか物にあればよいがト此時百足久五郎
出て(久五)御家老さま今日こそは無念がはれ升るぞ(森)
何無念を晴せとい(久五)いつぞや御子息を討る若殿今
日下屋敷よて御切腹を大殿より賜はり是にて御貴殿の御
胸も晴れ升ふ(森)スリヤ殿の殿命よて苦願には御切腹と
あ(久五)いかにも太刀どり舞鶴左膳とのト此時奥より以
前の諸士出て來り(諸)御家老お悦びにムらふ(森)是にて
手前が安堵(久五)おかしかんじんの目當らしめ(諸)國

家押領に御子息あくて、誠に残念(森)御心配あるが今日

養子を得てゐる(みなく)何とおつしやる(森)いまだ久

五郎は存ねど最前参りし伊勢参り彼れは余が妾かかのが

弟なれば我外妾の胤といふらしむば余もや殿も兎角

あるまじ(みなく)流石は御家老より御思案ト此時か

さよ犬おはれ出て(さよ)アレエ(森)そちやさよでさい

かト此時犬出ておさよに囁き甚の助出て犬を木刀にて打

殺とかかの出て(かの)是が附の(さよ)病犬でムリ升する

(森)小腕にして(甚)アイヤお座敷を穢し升したとみあ

くかんしんの仕打まで道具廻る

○本舞臺都て下屋敷廣間の体爰に玉井富右衛門舞鶴左膳

居て(富)御家老よは夜分の御入外御苦勞にムリ升る(左)

此度の一條殿殊の外怒らせ賜ひ終に今日若殿の御切腹賜

りしぞ(富)スリヤ若殿へ御切腹(左)若殿身持持坊との上

遊里よかいて森太郎を手討にせし言詞同断との御立腹

にて亥の刻を限り御切腹則介措人は此左膳心の内をお察

下さると此時奥より慶三郎白装束にて出て来り(慶)チ、

その切腹承知あるわい(左)スリヤ若殿よは流石の驚き入

たる御身の覺期(慶)承れば亥の刻を限り切腹刀をはやく

もて(左)アイヤ父君の仰せには願腹どの御上意ムリ升

る(慶)何願腹承知いたした富右衛門用意致せ(富)ハ、ア

とは入る(慶)コリヤ左膳此正宗にて我頭へを(左)スリ

ヤ此正宗にて此時富右衛門三寶扇を乗せ持出て(富)

斯く成り果賜ふも元は某より死出のお供あるし下され

(慶)その義を相ならぬ(左)生て忠義を立賜ふべし貴殿此

座に有合すは御退出下され(富)是非及ばぬト富右衛門

は入る(慶)舞鶴左膳我首刎よ(左)アイヤ若殿只死を急れ

賜ふは何かお心お思示しが(慶)此後に及びその方へ申置

一義ありト灯を消す(慶)是迄の亂行の全く心亂せしよ

らせ何卒父の怒りにふれ因果家督を弟二郎丸に譲りな

繼母が心満足なるべし(左)スリヤ是迄君へ對し繼母が

何か怪しき(慶)アイヤ別な怪しき事なければ焼野の雉子

夜の鶴いつや森太郎害せし根を絶し某(左)森

太郎を御手に掛しハ御所存あつてムリ升るか(慶)當家

は害をなす者は彼一人此義申置しは早首打てよ(左)イ、

ヤめつたに打申さぬ今日後日を望しハ人知れず君を落

し申さん爲ト此時襖を掛け富右衛門ばんばりを袖に隠し

伺ひ居る明りうつるゆへ(慶)富右衛門か(左)お覺知召れ

ト刀を抜て慶三郎に叩く富右衛門こなしよて幕

○四幕日本舞臺都て御濱御殿祝宴の体爰に茶道腰元四人

を追廻して居る(茶)ト若殿の御機嫌を伺うて来よムト

這入る爰へ向ふより梅衣振袖形り早月腰元形り出て来り

(腰)あなたハ御家老の御娘御向ぞ御用で此ね館へ(梅)サ

ア今日ハ大殿さまの御誕生日に花火があるとの事(早)

それに御部やさや迄御祝儀をト此時上手より本庄菊之助

出て来り(菊)チ、御女中方大膳のおめしチ、是を舞鶴氏

の御息女(梅)あなた菊之助さま(菊)お女中方はやく御

前へ(腰)畏り升た(早)ト私ト這入る(菊)梅衣の

梅)いつぞやわけの文の返事を(菊)イヤその義は御家の

きつい御法度(梅)スリヤ御返事かかない升せぬか(菊)そ

こ元の親御が氣に入らぬおせと仰せ被成れいかに嚴命お

ればとて若殿諒めやらで討し人になしそれゆへいやで

ムる(梅)スリヤモウ親とて御主とて御家の爲にあらぬ者

え何の打捨置升ら(菊)流石は梅衣どのそき聞く上は二世

の契りを結び申さん(梅)此身の願ひを(菊)いかも仰せ

承知いたしたまかし斯く契約致す上は最早夫ト此身の爲

左膳どの、底意をさぐつて下され(梅)スリヤお安ひ事

(菊)今宵の内に御内通をねがいたし(梅)願ひたいと他

人らしひト兩人仕打まで道具廻る

○本舞臺都而御殿の体爰に八重姫局松尾龜笹居て愛妾お

藤の方傍に住居居て(龜)スリヤとふあつても八重姫さま

には(姫)此事斗り(松)お藤さまのね詞をお聞き被成れ

升るか(姫)さふでいあけれど(藤)それはあなたがわるい

了簡成程いつたん夫とせし慶三郎さまは非業の最期わら

わが子の二郎丸よとなたを再縁又森右衛門の企てをくじ
く一の家の大事件やわいのう(龜松)姫君御返事をト此時
左膳出て(左)その御返事の手前が致さふ(藤)左膳どのが
(龜松)此場のよふすを(左)次に残らず御再縁の義は奥
用人下田伊織より御返事(藤)下田伊織を以て(左)下田氏
とよぶ下田伊織出て来り(伊)次に承とまが御再縁の成
り升せぬ(左)伊織どの姫を殿の御前へ何事も手前が胸よ
トみまへく這入る左膳のこり居る愛へ森右衛門出て(森)
左膳どの何と御返事成る(左)是は鷲尾氏只今の様子を
森次に承りしが姫君に二郎丸を娶合んと無休のそ、
めひつさやう姫めればこそ何と手前が竹菰之助の妻よ申
し受た(左)御一門の事あれど姫君尼の望み故此義は
何とも(森)姫君には(左)慶三郎君のばたいを守りかし
甚之助どのにはふつ、かながら手前が娘を(森)スリヤ御
息女をよくこそ仰せ下されたいかよも申し受升ふ(左)然
らば後刻(森)左膳どのト這入る愛へ梅衣出て来り(梅衣)

上より情あふ常から憎しと思ふ甚之助の嫁にせしと
(左)様子を知りし上、甚之助よみあふて(梅)それじやと
申て(左)親の詞を背くかト無理に手を取り這入る愛へ富
右衛門出て来り(富)思ひもよらぬ左膳どのが今のありさ
ま鷲尾がむほんも悟り得ず我娘を甚之助に此上は左膳を
ト仕打にて道具廻る
○本舞臺都て奥御殿所の休障子立わり愛に龜松尾居
て(龜)此程鷲尾どのが密にむほんを企て(松)それゆへか
藤さまが二郎丸さまの御身をいとひ障りのさき内(龜)八
重姫さま再縁を(松)その御返事、伊織どの(龜)最前合せ
し通りト兩人這入る愛へ伊織酒又酔ふて出る(伊)さつさ
の御返事をわすれてのんだト此時障子とあける愛よお藤
居て(藤)伊織どの(伊)あなた、御部屋さま(藤)愛へト手
を取る(伊)何を被成れ升る(藤)左膳どの、返事よりそな
た色よい返事を(伊)何色よい返事とは(藤)はづかしさが
らそもじに惚升た(伊)それは眞實に(藤)アイト屏風を立

る龜出て様子を伺ひ居る愛へ中老村川出て来り(村)龜
笹どの御部屋さま(龜)エ、アノヲ、それ、今御瀬が
(村)御腹痛御前がおめしドレ御見舞を(龜)お部屋様我君
のお召とて村川どのがト屏風を取る伊織あわて、花道へ
行を村川見答め(村)それよお出いどなたさま(伊)私(村)
此寝所へ殿達の来べきはづさし(龜)それいかやうでムリ
升る御針を願ひし御醫師ト此時ぬき捨し上下の紋を見て
(村)此衣服の紋、則(伊)藤(村)伊織どのかとまな、
仕打にて道具廻る
○本舞臺都而町はづれの体愛へ久五郎鉄砲を持出て(久
五)鷲尾どのに頼まれて治郎丸をたつたト討ト忍び松
尾鉄砲を持ち出て(松)甚之助を一ト討ト忍ぶ愛へ富右
衛門鉄砲を持出て(富)左膳をたつたト討ト忍ぶ愛へ乘
物三挺行列にて出て這入る鉄砲の音とる三人影より出る
捕手大勢出て立ち廻りに成り松尾久五郎逃して這入るみま
へ富右衛門を取り押へ(捕)曲者取つたト見得にて此の

道具廻る
○本舞臺都而鷲尾邸の体、に森右衛門甚之助足輕居て
(森)一大事とのまらせり次郎丸さまの御身に凶事でも
ト愛へ左膳次郎丸出て(左)若君の御安体(甚)若殿よ、御
無事成りしか(左)最前歸館と見せたる、拙者がさうづの
みなから(森)シタそれある拙者(左)一人は捕押へ是
へ曲者をト富右衛門と細をかけ仲間引立出る(富)子細わ
つて御家老を現ひしが運拙く何れへなりとお引下され(
甚)いかよも望まよ任して(左)イヤ此曲者は拙者が預り
ト愛へ梅衣出て(梅)父上是があらはさ(左)そちが諺の
甚之助どの(甚)スリヤ是あるがあらはさしの(森)そちが妻
の梅衣どのト此仕組みてまな、仕打みて幕
○五幕日本舞臺都て浄光院焼香の体愛に住職住以同宿住
ひ居る愛へ八重姫左膳の妻高の井娘梅衣家中の妻樹の戸
露芝藤浪鳴瀬關家出て来り(住)最早勤經も相濟升たれば
イザ浮靈拜(高)今日の佛事を見るふ付ても姫君の浮刺髪



のか姿(八)是も定る約束(露)それに付ても左膳様の浮娘
 御梅衣(八)藤(森)右衛門さまの御養子甚之助様御縁組
 (鳴)兎角當時の御主の爲より我身の(高)それ此母は氣
 に濟まねと夫と意入りが合照しての替入れ(八)余事はど
 り前例年の通りみな者御焼香を(高)ハ、ア(梅)モン母
 様お焼香は此梅衣お先へト此時村川出て(村)その御焼香
 は叶ひ升せぬ(梅)なせ叶ひ升せぬ(村)穢れし身ゆへ(梅)
 何穢れしと(村)親も親なり子も子なりあきたに(高)
 井子の成敗の出来ませぬか梅衣とあたり下りやア今日村
 川の殿の御名代御焼香は渡邊どの、御内室よりトミさ
 く焼香をとる(村)最早焼香済し上は姫君さまに(み
 な)御越し被成さまし(み)さく(高)遺入、梅衣高の井
 のこり(梅)母さまお先へ(高)娘待ちや(梅)ハ、ア、イ(高)
 今村川殿に耻か、され家のかきんなれば鷺尾と縁を切つ
 ても(梅)父上の御頼されば縁きる事いやはやといな
 ア(高)エ、いあふふふない人であしト此仕組打仕て廻

○本舞臺都て鷺尾屋敷座敷の体爰も菊之助甚之助おさよ
 居て(菊)どふか是よて御納金を(甚)イヤ、イヤとさやうでム
 らぬたま、のち越コリヤと燭臺を持って(さよ)畏り升
 たト遺入る(甚)菊之助どの一寸御免を(菊)サア、御遺
 慮なく(甚)ばやくてうじをもてト甚之助上手へ遺入る
 (菊)いつや御遺御殿あつて梅衣どのくれ、願をし
 彼の一昨鷺尾親子が心を探度さものとやアト爰へおさ
 よ出て来り(さよ)お待とふさまでムり升た爰へ甚之助
 出て(甚)菊之助どの中座大きに失禮爰へ梅衣出て来り(梅)
 我夫に只今下向致し升た(菊)スリヤ是成るが甚之助どの
 ハ、アこあた(梅)あなた(甚)ソリヤ此仁を菊之助どの
 にもござんじか(菊)いかも左膳どの、娘御さうしかや
 う赤女て有らふと知らで大事を頼みしが(梅)サア是よ
 はだん、わけある事(菊)エ、返とくも(甚)手前が女
 房なると被成かつと、御師被成れ(菊)返らいで何と致

そうト是よて道具廻る
 ○本舞臺都而鷺尾邸庭先の体爰も以前の(高)の井石
 仕早月居て(高)モウつかへは納り升たそなた(奥)へ(早)
 イエ、どふもわたのよふすも常ならず爰へ往ともム
 り升せぬ(高)そふ言すといつても(早)是非ない事でも
 り升るト遺入る(高)我夫左膳どのいある天魔が魅入り
 いか鷺尾と親しく女あがらの武士の妻死をもつて我夫を
 諫める身の覺期お下りさ内諫めの書置ト仕打にて道具
 廻る
 ○本舞臺都而鷺尾邸庭先の体爰へ菊之助出て来り(菊)梅
 衣甚之助被をも諸共ト爰へ梅衣出て来り(梅)ヤア菊之助
 さまかその腹立ハ御道理待て下さんせ(菊)ヤア此期及
 んでト爰へ甚之助外忍の侍出て菊之助を押へ(甚)問男見
 附ト此仕組よて道具廻る
 ○本舞臺元の左膳の邸の道具に戻る爰も左膳手紙を持居
 て(左)扱ハ我胸中を悟らす自害さしたるか爰へ村川出る

(村)兄上(左)村川何にしよ參つた(村)今日菩提所よて
らわが言し詞も取入り自害がとふかあなたのお心(左)
是成る書置をよみしと(村)襖としよ聞升たどうかああた
のお胸の内(左)明すは何れ後日に(村)いふたり聞たり
(左)先ろれ迄ハ妹村川(村)兄人さま(左)今宵の事かあら
ず人にさどられぬよふかんぞつくと二人仕打みて幕
○六幕目本舞臺都而池田喜治馬内の体爰喜治馬の娘お
新居る町人居て(町)どふの御師匠さまへよろしくと道入
る爰へ辨助久太出て(久太)どふか旦那氣の毒だが置両斗
り(辨)けふのいけねへよと内へ道入る(辨)お新さんけふ
の置入りかねへ(新)辨助さん(辨)コレサお新さんそふそ
げなくいわねへでもト手を取る(久太)モ旦那(辨)まだ
居るのか今貸すから先へ内へ待つてくれ(久太)お頼と申
し升るト隣の内へ道入る(辨)サアお新さんいつもながら
同じだがけふの色よい返事をト追廻す爰へ秋藏出て来て
内へ道入り辨助を投のける(辨)アイヌ、ヤアこなたを秋

藏かト述て道入る(新)よい所へ秋藏どの(秋)あいつはわ
るいやつたナア(新)コレ秋藏どのいつぞや頼んだ若旦那
の御返事は(秋)それ所ではあるサ、さつさの手紙ト道入
る(新)コレ秋藏どのどうぞ若旦那の文の返事それが聞た
いわいなアト仕打みて道具廻る
○本舞臺都而喜治馬座敷の体爰に慶三郎手紙を見て居て
(慶)誠に此手紙の様子ではいよ、鷗尾森右衛門養子を
あして家國押領ト爰へお新茶を持出て(新)若旦那様お茶
一つ(慶)お新どのシテ父御を戻られしか(新)それゆへわ
なたのお傍に(慶)身が傍は叶ひませぬ(新)それは御願欲
でふり升る聞わあなた父上の古主さまとの事此家へお出
わりしとさより御見染申しとふぞ一夜のおなさけおは
らし候成れて下さりませ(慶)左程迄の志ざし今は此身の
世を忍ぶ世に出し時よ(新)そんなら御家つ、がのふ納
まり升たその上にては(慶)世間をはれて妾もなしくれ
ん(新)お嬉しうふり升するト茶をこぼす(慶)巨りヤ汲み

置さし茶を(新)とんだ御鹿相と、以前の手紙よてふく
(慶)大事の手紙ス、ヤ國元より知らせの密事(新)私しハ
反古かとさやうさら此日向で(慶)それでは八目よ(新)イ
ニ私が番をして居り升れば(慶)それにて安心身その間
に手紙の返事左膳方へト道入る爰へ以前の辨助出て手紙
を見て悔り(辨)とんから源三郎といふやつ(新)ヤか
さへはト干ある手紙を取りよ行を辨助手紙を取り(辨)手
紙を訴へやうびの金に(新)ア、モ、待つて下さり升せそ
の手紙を戻して下さり(辨)此手紙を戻せとは承知か(新)
何承知かとは(辨)今さつきもはじかれたが是がはしくバ
辨助も抱れて寐るか(新)それじやといふて(辨)そんなら
訴へよふか寐るかいつとれ事(新)ア、モ、承知じやわい
なア(辨)そんならいよ(新)承知は承知なれと斯うし
て下さんせ今宵清水村の地蔵堂でこつとり忍んで(辨)今
夜初夜を相圖に(新)だますに手あし命を捨て(辨)エ、
(新)命に掛て来て下さんせトお新道入る(辨)ア、有難た

いよふふの事にてそれといふのモ手紙ト手紙を頂
く爰へ久太出て居て此手紙を後より取る辨助悔りして
(辨)やわれは久太手紙をどうする(久太)こいつは一番金
にせよやならねト二人仕打にて幕
○七幕目本舞臺都而松戸宿本陣場外の体爰に雲助富藏仲
間三六居て(富)どふか翌日の荷物をお荷せ下さりませ
(三六)何ぞ若旦那言被成るか聞て遣るからそこよ待つて
居ろト三六道入る(富)いつぞや左膳どのを討んど斗りし
が返つて又もや助られ逆臣鷗尾が企つ大望の証據得んが
爲姿をかへて隠し目附世よ忠義程苦勞はないわいと寤よ
て廻る
○本舞臺都而本陣座敷の体爰に甚之助三六居て(甚)問屋
をさし置荷物を願ふの心得ぬ奴是へ通せ(三)ハツツの
の雲助爰へ来いト此時久太出て来り(久)それへ參つても
よろしうふり升るかト甚之助と顔を見合せ(久)ヤアをら
り(甚)われ(三)違つたト手ゆへじやねへ(久)イヤ

よハト腹へ刀を突立る(村)ヲ、あつばれ伊織とのト此仕組よて道具廻る

○本舞臺都而鷲尾妾宅横手の休爰へ甚之助出て(甚)姉の内立よつて國の様子が聞たいがどふか客がゆる様子幸ひ此松裏からそつと忍んでト是よて道具廻る

○本舞臺都而鷲尾妾宅の休爰に前幕のかかの重兵衛居て(重)それじや金は貸されぬのか(か)の(サ)元は兎もあれ金を貸しておまへを世話することならぬよ(重)そふだらふよ手めへの兄弟なら親を殺しても世話をするだろふ(の)の(何)親を殺した(重)おめへの親の小霜さんを殺して村を立退た甚之助と世話をするからそれをいふのよ(か)の(ム)、そんならか、さんを殺したハ重兵衛さんくわしひ話を聞して下さんせ(重)イヤ金を貸さあらはあそふが(か)の(ど)ふあど仕よふわい(重)しかも手めへの所から手紙の来たそのぼん小霜さんを甚之助が殺したのよ(サ)約束通り(か)の(お)金を貸を程にの(ト)問よ待

出し這入る(秋)サアよふく彼の正定のみがさがより升たト見せへのけて這入る茲へお豊お絹出て(豊)庄之助茲も居やつたか(絹)モウお客さまは歸り升たか(庄)只今よふくト茲へ幸助出て来る(豊)おまへはと、さん(庄)旦那さま(幸)菊之助どの梅衣どの(庄)絹ハ、コレ(庄)たがいよ包む身の上(絹)主家の爲ゆへ今は下女のお絹(豊)わたし娘の豊(幸)寛治馬を替へて刀屋幸助(庄)拙者手代の庄之助(幸)若殿はじめ我くまで替れば替るものじやあアト茲へあるき出て(步)幸助會所まで来て下され(幸)ハイト幸助あるき這入る(絹)心懸りお會所の迎ひ(庄)コリヤ念する観音さまのお力を(豊)瓜入りして願ふて参り升るト二人這入る(庄)由斷のちらぬ會所迎ひ事さき内に鹿藏へもト奥へ這入る茲へ持成侍新藏出て来る(持)此家エ刀のどきしと見へるな(新)さやうよムり升る(持)あの刀を取つて見せやれ(新)是でムり升るか(持)ハナハ心待ぬ此刀ハ家の寶正宗梓慶三郎又譲りしが此家にとふし

て居て(重)それじやアト殺入りやつてト這入る茲へ甚之助出て(甚)おまへの姉さん(か)の(ヲ)、親の仇甚之助トさつて掛るを立廻りにて甚之助留ておかのに疵を付ける(甚)手がまわつたらモウ是までト立廻りト、おかのをこそす重兵衛出るを又立廻りにて殺す茲へ菊之助梅衣出て(菊)コリヤ何(甚)是も約束こなたはすこしもはやく(梅)甚之助のお情け添じけさ(甚)最前、し通りゆへ(菊)落付先は本所よて寛治馬が宅(菊)ヲ、ト仕打よて道具廻る

○本舞臺都而左膳邸の休茲は村川よ左膳居て(左)それがし若殿三郎君を助けしも鷲尾が悪事をくじ死再び御世み出さん(爲)村)そふ云事とは露まらず(左)我是迄の放埒(村)忠義のね爲でムり升たか(左)何かは奥よて(村)はあし申升るト仕打にて幕

てコリヤ問ふて見やれ(新)此家の者ハ居らざるかト茲へ秋藏出て(秋)モ、その品は大事の刀こちらへお返し下され升(持)是成る品ハ身が是非とも求めた(秋)そふ云譯には参りませぬとふかお歸り下されと刀を持這入る(持)コリヤ新藏おれなる正宗その方の働よて買求めて参へれ(新)畏つてムり升ると茲へ金五右衛門出て(金)我君是よ只今御部屋お藤の方様二郎丸さまお國元よりお附よムり升る(持)意通なせしお藤はい返せ(金)イヤ我君手前如きが(新)コリヤ我君が直く(よ)持)さやうか金五右衛門供致せ、持成金五右衛門這入る(新)此家へ忍で正宗を奪へ取り金は身共ト忍び這入る是にて道具廻る

○本舞臺都而持成公旅館の休茲は藤二郎丸諸士住ひ居て(持)下田伊織と森夫お藤目通り叶わぬ立て(藤)スリヤ此身は決してさやうな事は(持)それよ相違あり(藤)なか、此身にト茲へ甚之助出て(甚)お部屋ハ不義よ違ひらぬ(藤)スリヤ不義といふ何ぞ證據でも(甚)

その証は局師証が白状いたせし口書是で不義でらぬか(藤)ハ、(甚)是成る口書我君御披見下され(持)不義働し女沙汰を待ふぞ左すれバ二郎丸の余が胤ならず今より甚之助に家督を譲るであらふ(甚)スリヤ拙者めに(諸)かうけく(甚)有難ふムリ升る(持)コリヤ甚之助興へ参つて養子の孟致すであらふ(甚)ハ、(諸)さやうムらバ我君様(持)ヲ、トミさく、這入る此時お藤自書をす(二)ヤ、母上は何ゆへ御生害(藤)そきたは全く翁夫の胤ならず我君へ申上此身の不義いたづらに死て御訃びをする程に父御の御身を大切よしてたもそきたの成人を草葉の蔭から待升ト落入る(二)母上は御果被成れてかハ、ト泣爰へ甚之助諸士出て(甚)お藤どのに自書を(諸)是にて望みの通り(二)ヤアそきたは甚之助(諸)いつそ此奴も(甚)苦しうらぬ此儘くト是にてミさく仕打道具廻る

○本舞臺都而刀屋裏手の休爰へ飛脚出て(飛)鷲尾さまより大殿さまへ過急の御用ト爰へ新藏正宗の刀を持出て(飛)扱こを盗人ト新藏扱打に飛脚と切る(新)此家へ忍び奪ひとつたる正宗ト爰へ慶三郎出て新藏を切殺す正宗を取り(慶)是ぞ正宗(富)若殿何處もお怪我ハト爰へ富右衛門門お豊お桐秋藏庄之助幸助出て(慶)彼等如ふ(みなく)

目出たく正宗戻り(慶)ハ、心得ぬ數多の同勢(富)あれど則甚之助君の家督に付國へ俄下れる同勢(みなく)スリヤ甚之助が(慶)ハ、トミさく仕打にて幕

○大詰本舞臺都而鷲尾邸の休爰に森右衛門諸士四人居て(森)何れも何と今日殿の御殿にいらして今様の御催し是ぞ我日頃の大望成就の時節到来(諸)されバ御家老の仰せの如く今日舞臺のせさくさまされ(森)忠臣左膳をはじめ邪魔立致すやつせらり御前よいらして(諸)せん中と首尾よく(森)それ又付ても悴甚之助姿を替させ本國へ遣わせしのでまた何の音信なき(諸)その義にお氣遣ひ被成るな今もよきお便りがムらふ(森)何に致せそれがしも舞曲にも懸りたれバ(諸)直様是より御殿へ出任を(森)いつれも(諸)御同伴致そふト此仕組よてま

○同返し本舞臺都而能舞臺の休爰に左膳森右衛門菊之助富右衛門慶三郎とあり今様望月あつてト(森)ヤア何奴あれば我を何とする(左)何とそるとハ事おかしや汝が悪事を見出さん(菊)斯く今日の今様を幸ひ(富)一々見出そ汝が隠謀最早叶わぬ鷲尾森右衛門(森)隠謀おどろハ事おかしや何を証據の(左)たつて申し張バ踏付繩懸よふか(森)も上此上ハト是よりミさくにて立廻りに成り見得よて幕



世情種画

○同返し本舞臺都而殿中庭先の休爰に森右衛門居て(森)よふく爰までは落延しが隠謀露顯とハ口おしいト爰へ甚之助出て(甚)イヤその隠謀露顯はミお拙者が業(森)そちハ悴何ゆへさよふお義を(甚)ヤアそをいづぞや千住の本陣で賊の親に逢つたその後改心なし手前が証人でのこらす御前へ(森)ヤ、(甚)その時若殿慶三郎君を討つたといふは偽りにて賊は久太が偽首ト爰へ侍大勢出て立廻りよ成りト、森右衛門逃て這入る(甚)斯く森右衛門が悪事を訴へし此甚之助悪人とは言作ら一旦養父と定めし森右衛門且此身も改心なせば人々は顔向けからず此上の自宅切腹なさんト爰へ侍大勢出て甚之助を取巻(侍)甚之助覺期ト立廻りに成りト、甚之助刀を腹へ立る(甚)斯取巻れし上ハト立腹にて苦しミさく仕打よて道具廻る

○本舞臺都而奥庭の休爰に森右衛門大勢を相手よ立廻りあつてト、みなく、逃這入る(森)此上ハトまづ爰を落のび時節を待ト爰へ慶三郎左膳富右衛門菊之助出て(慶)茲を逃延んとは(左)ひさやらの森右衛門(富)汝が養子甚之助ハ我悴今ぞ改心なし自殺なしたればいささよく(菊)伏罪致せ(森)伏罪おどろハ事おかしや(慶)汝後悔おしいささよく切腹なさんト門の方(左)若殿格別の御仁徳

みて(富)御舎弟たる次郎君さまをもつて(兼)汝が家の絶へざるよふ(慶)致しくれるが改心させや(森)ア、誤りなく我おろかして隠謀企て君へ對して濟さる事今日只今改心せし君恩の報じ奉らん森右衛門前切腹御見届下されト腹へ刀を突立る(慶)流石は森右衛門(左)通れなる切腹(富)悪人亡び善人榮し上からは(將)御家の萬々歳(慶)ナ、目出たいく、みなく仕打めて打出し

○中幕本舞臺都而觸越の体愛へ同宿四人出て來り(同)トレ供物を備へ升うのト愛へ番場の忠太出て(忠)イヤその品備へる事相成らぬ(同)何でとめるのだ(忠)わんら平家に力を添へれば死罪だぞ(同)ヤ、(忠)さつき話を聞ば平家の重寶經卷の薙刀奉納せやらそれを此方へ取り得てくれれば(同)行ふなりぬからぬよふ致してくりやれ(同)それ(同)安(忠)最早是へ來るよふをまのべとみま(同)這る向ふより觸岐經伏屋薙刀を持出て來り(伏)常觀音へ御家の重寶經卷の薙刀奉納せし今宵密に此代參(經)それハ御苦勞よムるト愛へ忠太同宿出て薙刀を取り掛る是にて立廻り又成るト、薙刀谷へ落と(伏)ヤ、大切成る薙刀(經)はるかの谷へ(忠)すこしもはやくと三人立廻りながら這入る道具廻る

○本舞臺都而觸越山奥の体愛へ景清非人の拵へ三保谷

ろんじの形にてせり上る(景)何ろじどの見たよふな(三)こあたの體東よて(景)あふたの丁度十歳跡(三)折よく是で逢升たあ(景)わしの御當地は始めてどふかこあた何れもさまへ御引合せを(三)それじや貳人りども(三)にト是より御目見得のせりふわつて(三)斯うして願つて置バ大丈夫(景)是であんまを仕升(三)まかし今もヨリヤ平家の御世だ(景)こあたハ平家をひるきにする々源氏の強者がこあたの襟髪を(三)引かんとすればふりほどかんと前へ引く(景)こなたの首をねじきるか(三)そなたの腕をひつさるか(景)首のつよさよ(三)腕のつよさよ(兩)人)ム、ハ、(景)むしりこれから浦邊の方へト行を(三)景清さて(景)何をしをかげきよとは(三)委やつせし景清三保谷よ後を見せば恥辱であらふイテ勝負致せ(景)汝が推量の通り景清なるハト兩人見得めて引拔三保谷鎧形り景清四天形成るト是より大立廻りに成るト、大見得めて幕

明治十七年十二月廿六日御届 (定價金八錢)

編輯兼出版人 保坂由兵衛